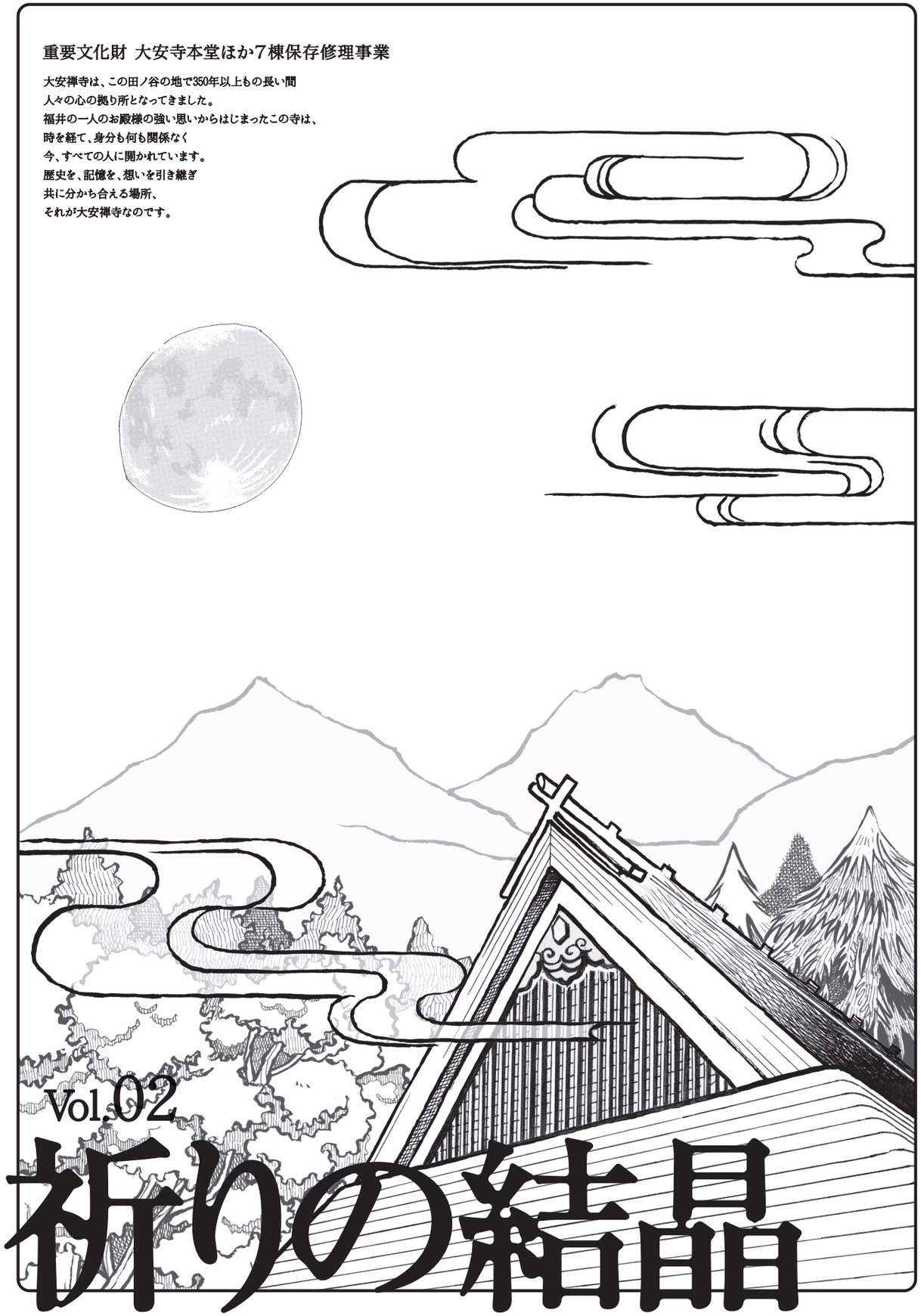
## 重要文化財 大安寺本堂ほか7棟保存修理事業

大安禅寺は、この田ノ谷の地で350年以上もの長い間
人々の心の拠り所となってきました。
福井の一人のお殿様の強い思いからはじまったこの寺は、
時を経て、身分も何も関係なく
今、すべての人に開かれています。
歴史を、記憶を、想いを引き継ぎ
共に分かち合える場所、
それが大安禅寺なのです。



Vol.02

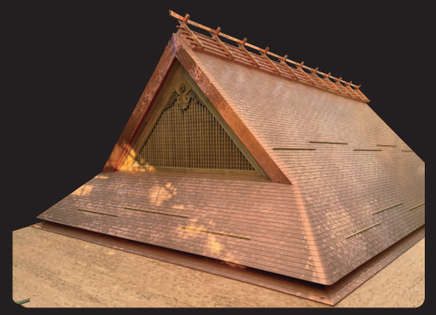
# 祈りの結晶

## 次回

Vol.03

### 護りゆくもの。

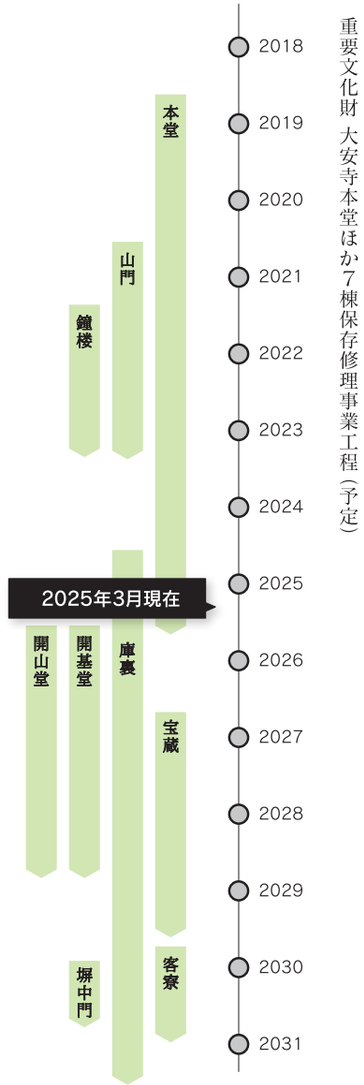
本堂完成・庫裏 ほか



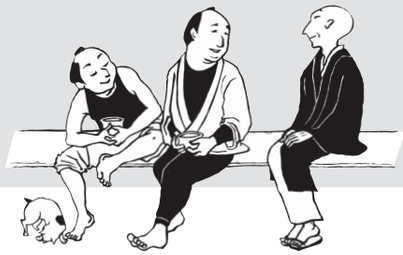
四代藩主・松平光通公の想いによって建立された大安禅寺は、祈りの場であると同時に、禅の教えを通じて心を養う場所でもありました。時を超え、今、いよいよ本堂の修理が完了し、かつての姿を取り戻します。これにより、大安禅寺の歴史に新たな節目が刻まれます。

しかし、歴史を未来へとつなぐ旅は、まだ続きます。庫裏、開山堂、開基堂、宝蔵などの諸堂の修理を進めることで、この地に息づく想いを護り、次代へと伝えていきます。

次号では、本堂の完成報告とともに、これから進む修理事業の詳細をお届けします。
受け継がれる祈りと歴史を、ぜひその目で見届けてください。




この情報誌は修復完了に向けて、2年に1回発行します。
大安禅寺の大規模な修復にあたり、工事や調査によって見えてくる建物の裏側は
当然のことながら、これまでの350年以上の歴史に付随する人間ドラマを、
多くの皆様に知っていただきたいと考えています。
大安禅寺を知り、実際にこの地を訪れ、手を合わせてみてください。
すると、時を経て、今日に受け継がれる心と祈りを感じることでしょう。



臨済宗妙心寺派
北陸三十三ヶ所観音霊場第十番札所
萬松山 大安禅寺
TEL.0776(59)1014 FAX.0776(59)1874 〒910-0044 福井市田ノ谷町21-4
【 ホームページ 】www.daianzenji.jp 【 Eメール 】info@daianzenji.jp

本誌は重要文化財大安寺本堂ほか7棟保存修理に関する
国、県、市の補助事業の一部として刊行しています

公式SNSアカウント有り。フォローお待ちしています。

当修理過程を年度毎に動画としてまとめ、大安禅寺公式YouTubeアカウントにアップしておりますので、ぜひご覧下さい。
また、現場公開も定期的に開催致しますので、ご参加お待ちしております。

# 山門

令和4年5月
修理完了

さんもん

寛政4年（1792）建築 / 解体修理
高麗門・桟瓦葺・左右袖塀附属

今回の修理では、史料や解体調査の結果をもとに、建立当初の姿に復原しつつ、歴史的価値を守るための補修を行いました。この修理により、山門はかつての荘厳な姿を取り戻し大安禅寺の歴史的な趣がより鮮明になりました。これからも、大安禅寺の象徴として、訪れる人々を迎え続けます。

〈主な修理内容〉
◎大扉や袖塀の潜り戸を丁寧に修復
◎山門下を石段へ復原、石敷の参道を整備
◎2017年に倒壊した山側の袖塀を修復

## 石と瓦、福井の一級品を用いて

山門の屋根部分は、江戸時代中期の寺院建築の時代性と福井の地域性に合わせて、越前赤瓦の瓦葺と笏谷石を用いた棟石を組み合わせた構造が採用されました。足羽山の麓にある同じ臨済宗で松平家の菩提寺の一つである「瑞源寺（ずいげんじ）」などを、時代考証の参考にしています。

## 新旧の建材で堂々とした姿に

平成30年（2017）に雪害によって倒壊してしまった山側の「袖塀」は古材を利用して修復され、漆喰塗りの美しい白壁が現れました。山門の大扉は、板材や建具に使用された鉄製の金具など、一部を再利用しながら整えられ、古材と補修材が見事に組み合わせられました。柱は創建当初に用いられた木材が曲がってしまった状態でしたが、できる限り元の材料を使うために工夫を施し、補修を伴って引き継がれることとなりました。新旧の建材が調和し、新たに堂々とした姿を見せています。

修理前の山門

## 笏谷石と福光石の融合

基壇は昭和に入ってすぐ、車道整備のためにアスファルト舗装となりましたが、笏谷石を用いた石積の基壇が復原されました。現在は、笏谷石を新規採掘できないため、島根県の福光石（ふくみついし）を補って修復を行っています。福光石は笏谷石と同じ凝灰石で、青緑色の色調も類似しているため採用されました。

昭和初期頃に山門前で撮られた写真

# 鐘楼

令和4年5月
修理完了

しょうろう

寛文3年（1663）建築 / 解体修理
桁行一間・梁間一間・一重・入母屋造・こけら葺

長年の風格を保ちつつ、美しく甦った鐘楼。今回の修理完了により、大安禅寺の象徴である鐘の音が再び響き渡ります。これからも、祈りと人々の安寧を願う場所として、その音色を未来へとつないでいきます。

〈主な修理内容〉
◎建立当初のこけら葺の屋根へ葺き直し
◎山門と同様に、笏谷石の石棟を使用
◎地盤沈下により変形した石垣を積み直し
◎350年以上鐘を吊るしてきた金具を補強

## こけら葺の曲線美

鐘楼の屋根は、瓦葺きから建立当初のこけら葺に葺き直されました。石棟は山門と同様に笏谷石が使用され、大安禅寺の伽藍建築群に統一感が持たれています。整然と葺き上げられたこけら葺の美しさは、職人の技術力の高さに驚かされます。すでに修復の完了した鐘楼の屋根の四周には、こけら葺による滑らかな曲線と先端が反り上がる「軒反り」が施され、本堂と併せて見応えがあります。

## こけら葺とは

1300年以上の歴史を持つ、日本の伝統的な屋根葺き技法の一つ。こけらは「柿」と書き、木片のことを意味します。竹釘を口にくわえながら、一寸ずつずらし重ねて葺き上げていきました。こけら葺の屋根は、板と板の間に空間ができることで通気性が良くなるとされています。

風化した石を修繕し、再び積み直す作業は小さなズレも許されないほど難しく、現代の職人の技術の高さを感じられます。

## 埋まっている石垣発見!!

鐘楼を支える石垣を発掘調査したところ、なんと5段にも及ぶ石積みが地面下に埋まっていることが発見されました。その高さは約5mで、同様の規模のものは福井では前例がありません。石垣も紙一枚入らないほど緊密に積まれており、同じような石垣は福井城の櫓や門などの重要な防御施設に見られます。

修理前の鐘楼

## 教えて高木さん！

### そもそも、今回の大修理での「復原」って何ですか？

今回大安禅寺において実施される「保存修理工事」は、それぞれの建物の規模や破損状況に応じて、「解体修理」（建物をすべて取り解いて組み直す）や「半解体修理」（柱や梁などを残して破損部を修理する）などの方法が取られます。

解体時の調査によって、残る痕跡から当初の建物の姿がわかり、元の姿に戻す「復原」をすることになりました。

当然ながら、工事を進める中で、資料が存在しないものにも行きあたることがあります。その場合は、大安禅寺の本堂を例にすると、創建当時である江戸時代前期の臨済宗の寺院建築および北陸地方（あるいは日本海側など）といった建築条件が近いものなどを参考資料として読み解いていきます。本堂の屋根の二重構造は時代的・地域性共に珍しいものでしたが、調査の結果として復原することとなりました。

大安禅寺は、禅宗の寺院らしく飾り気がなく真面目で強くしっかりしていて、お殿様の寺でありながらも、より民家に近い形式であるため親しみを感じさせます。これは創建に深く関わった大愚宗築の趣向が現れていると考えられます。しかし、笏谷石や北前船で運ばれてきた木材などの使用されている建材や素材については、当時の最高レベルのものを選んでいることから、福井藩主の永代菩提所としての役割を担う重要性が伺えます。

保存修理工事の原則として、できるだけ元の材料や工法を活かしながら、必要な部分は現代の技術を取り入れて補強する方針としています。非常に狭いスペースでの作業や、古い材料の再利用、耐震性能の確保などの課題に向き合いながら、完成に向けて工事を続けていきます。350年の時を経て、受け継がれたものと新たに生まれ変わったものとの調和性を含め、今なお大安禅寺を支え続ける姿を感じてもらえれば幸いです。

（公財）文化財建造物保存技術協会
高木裕雄樹さん

## 玄峰和尚のひとり言

長い修理の歳月を経て、本堂がようやく蘇る。柱一本、板一枚に宿る松平家と祖師方の思い。修理を通して現れた職人の手跡に、受け継がれる営みを感じた。人が建物を守り、建物が人の心を支える。その姿が今、甦ることがただただ嬉しく、ありがたい。

# 本堂

## ほんどう

万治3年（1660）建築 / 半解体修理
桁行25.9m・梁間18.2m・一重・入母屋造・
茅葺型金属板葺・四周下屋こけら葺・玄関附属

大安禅寺の本堂はとりわけ規模が大きく、方丈型本堂としては国内最大規模である宮城県の松島の国宝・瑞厳寺（ずいがんじ）の本堂などに匹敵する。山門から一直線に本堂に向かって参道を辿ると、藩主の御成に備えた大玄関があり、さらに本堂の最も上座に当たる場所に藩主専用の部屋「御成の間」が配されている。本堂内部は6室、中央奥を仏間として本尊を祀る。これらを取り囲むように周囲に広縁がめぐり、装飾は簡素ながらも荘厳な空間を保っている。

## 福井藩の民を思い、これまでとこれからのために祈りを捧げる場

大安禅寺の大きな特徴は、越前福井藩の藩主の声によって建立された寺院ということです。大安禅寺の創建のきっかけを作った福井藩四代目藩主・松平光通の時代は、江戸時代の幕開けから五十年も届かない時期。戦国時代が終わり、徳川家康によって開かれた江戸幕府が始まったばかりで、まだ混乱の中にありました。

光通が藩主を務めた越前福井藩でも、天災や藩財政の悪化、世継ぎ問題、さらには天守の火災など、次々と困難を迎え、福井藩の責任を負う光通自身が心の拠り所を探していたことは容易に想像できます。

明暦三年（1657）、光通は臨済宗の僧侶である大愚宗築（たいぐそうちく）を招き、大安禅寺の創建のために様々な教えを受けました。大愚は一度は断ったものの、光通は再度要請したことで並々ならぬ願いが届き、大安禅寺の創建に至ったとされています。

そうした中で建てられた大安禅寺の本堂は、近世前期の臨済宗本堂の中では国内最大規模となる宮城県松島の国宝・瑞厳寺（ずいがんじ）などに匹敵します。しかし、その装飾はあくまで禅宗の質実剛健を踏襲した簡素なもので、大愚宗築よる厳しい教えと、権力の誇示を目的としない藩主の誠実さが伺えます。

大安禅寺の本堂には、正面に向かって左手に大きな大玄関があり、これは藩主専用の出入口となっていました。麓にある山門から参道を進むと、大玄関に繋がっており、山門を抜けて藩主を乗せたお籠が大安禅寺へ向かっていく様子がイメージできます。

また、藩主が大玄関で籠から降りると、その目の前（本堂中心から左手）に「御成（おなり）の間」と呼ばれる藩主専用の待機室（応接室）が用意されています。床の間や付書院といった藩主のための設えはあるものの、最低限にとどめています。

中央には御本尊である仏壇に向かうように法要などが行われる「室中」と呼ばれる部屋があり、それを挟んで右手には、藩主の次に身分の高い者が控える「礼の間」が設置されています。法要などが行われる際は、これらの部屋にそれぞれが控えて御本尊に祈りを捧げました。

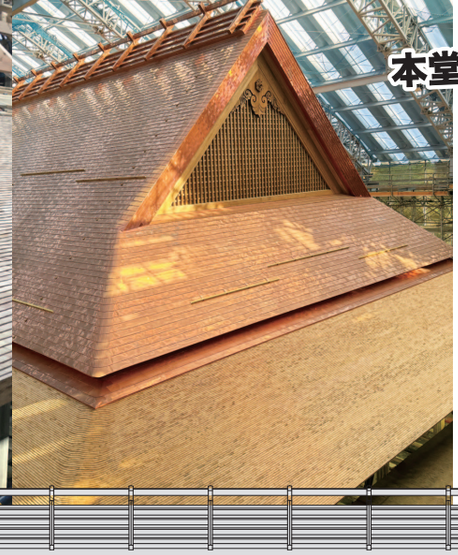
大安禅寺は、福井藩主松平家の祖先と両親を敬いご供養するためと、福井藩の民衆の安寧を祈る場所として生まれました。身分の違いはあれど、大袈裟な立場の区分けはせず、荘厳な雰囲気の中で粛々と祖先、そして福井のことを思って祈り続けた藩主の姿が浮かぶようです。



## 本堂の屋根は建立当初の姿に！

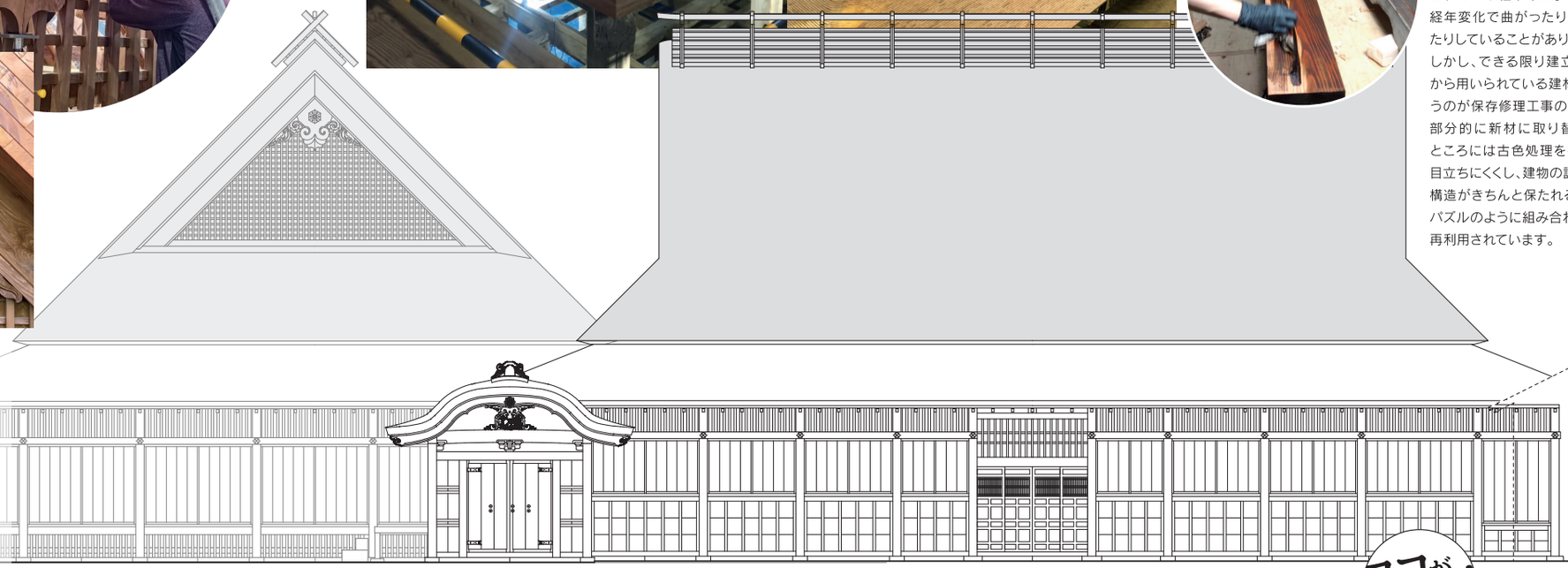
ココがスゴイ！

建立当時の本堂の屋根は、上部が茅葺、下部がこけら葺の二重構造という全国的にも珍しい構造となっていました。明治時代に瓦屋根に変わり、現在まで本堂の屋根を覆っていましたが、今回の調査によって江戸時代初期の建立当初の屋根に近い姿に復原することとなりました。下部のこけら葺はそのままに、積雪や維持管理の面を考慮して茅葺の部分を銅板葺に代替した構造となります。こけら葺きと銅板葺きが織りなす美しい屋根は必見です。



### 建物の調和を考えながら

本堂に限らず建造物に使用されている柱や梁の多くは、経年変化で曲がったり、腐ったりしていることがあります。しかし、できる限り建立当初から用いられている建材を使うのが保存修理工事の原則。部分的に新材に取り替えたところには古色処理を行い、目立ちにくくし、建物の調和と構造がきちんと保たれるようパズルのように組み合わせて再利用されています。



## 本堂ごとジャッキアップ！

ココがスゴイ！

本堂は基礎の部分が老朽化や地盤沈下などにより不安定な状態となっていたため、本堂全体をジャッキアップして浮かせながら床下の基礎工事をする大規模な「揚屋工事」が行われました。大安禅寺は急斜面でありながら狭いという立地条件のため、様々な工夫が施されました。中でも笏谷石で作られた礎石の部分は、約90個という数と大きさを考慮し、礎石ごと上げる「吊り下げ工法」に挑戦しました。これらの工事によって耐震性の高い建造物として、本堂の基礎が強化されています。

## 10万枚以上のこけら板が使われている!!

## 私がつくりました！

松浦建設（株）坂本和幸 棟梁

懸魚の彫刻を担当しました。これまでの工事の中でもほとんど事例がなかったので、自分に任せられた時は嬉しかったですね。平面的なデザインが決まっていても、それを立体的に彫刻するのは非常に難しかったです。作製には約1ヶ月ほどかかりましたが、後世に残るものに携われて、とても誇りに思います。

### 本堂を守る懸魚

懸魚とは主に神社仏閣の屋根の破風板につけ、棟木や桁の先端を隠す装飾板のことです。もともとは魚の形をした装飾であり、水と関わりの深い魚をかけることで、建物を火災から守るという願いが込められています。当時の意匠については資料が残存していないため、同時代のものを参考に製作しています。

### 発見された石鬼

玄関は藩主が出入りする大事な場所です。足元は笏谷石を用いた石敷きとなり、屋根の上にも同じく笏谷石の棟石と石鬼が置かれます。実は、屋根の石鬼は工事中に庭の中で発見されたもの。屋根改修の際に下ろされたままになっていましたが、また元の場所に戻されることとなりました。

# 本堂

ほんどう

## 建立当初の姿を通じて祈りの原点に立ち返り思いを受け継ぐ

大安禅寺の本堂は、田ノ谷の入り口に向かって東を正面にし、山の斜面に建てられています。山門からぐっと見上げるように参道が本堂まで伸びており、急な勾配をのぼって行く必要があります。また、斜面の狭い平地にありながらも、敷地をいっぱいに利用した大規模な本堂となっており、山門から上ってきた参拝者たちは圧倒されたことだろうと思います。

本堂の建築として大きな特徴として挙げられるのは、茅葺とこけら葺きを組み合わせた屋根の二重構造です。明治以降に全て瓦葺きとなっていましたが、当時の資料をもとに屋根の復原を行うことになりました。なぜこのような構造になっていたか、理由については明確ではありませんが、権力を象徴するような荘厳さよりも、民衆の立場に近い民家のような形式をとったのではないかとも考えられています。

また、本堂の内部は、藩主の専用の「御成の間」のほか、修行僧である雲水が役目を行う「知殿寮（ちでんりょう）」など、身分によって立ち入る場所が決められていました。しかし、武士の時代が終わりを告げ、身分が平等となった明治以降には多くの街の人が本堂に集うようになり、それに合わせて畳敷が広げられるなど改良が加えられていきました。

長い時代を経て、お殿様が通う寺としての役目から、徐々に街の人の祈りの場として開かれていった大安禅寺。建立当初から現在に至るまで、寺を守る人々が祈る人に合わせて工夫をこらし、変化を遂げてきました。今回の復原により建立当初の姿を現すことで、今一度、祈りの原点を肌で感じることができることでしょう。そしてまた、民の幸せや平和への願いという祈りが、次の世代に受け継がれていくのです。

### こぼれ話

福井藩第十六代藩主である松平春嶽が記した随筆『眞雪草紙（みゆきぞうし）』に、大安禅寺に関する記述が残されています。「ただ単に、仏法を信仰されるのではなく、実際のところは城砦を築くという深いお考えであったという。」という一文からも、大安禅寺が有事の際には福井藩の防御を担う重要な場所であったことが伺えます。そのため、山門や鐘楼などの建造物を見てみると、福井城と同様に強固な構造になっているのです。

## 仏間と知殿寮（ちでんりょう）

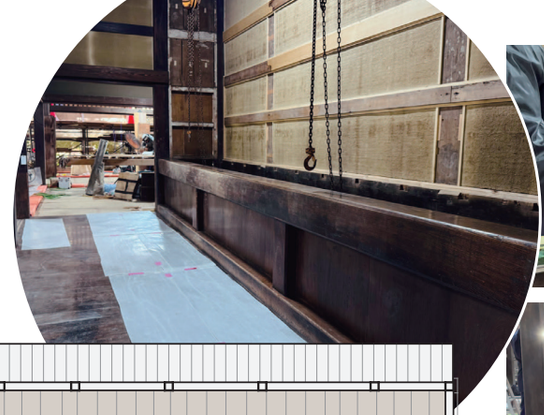
建築当初、本堂の中心奥に設置された仏間の裏には、裏手に二室の部屋がありましたが、時代の変遷によって後方に仏壇を拡張していました。今回の工事で復原される部屋は、雲水が寝泊まりする知殿寮（ちでんりょう）だったとされています。いわゆる「鍵の番」を担当する者の部屋で、柱には内側から鍵がかけられるように穴が開いていることからも、厳重に見守りが行われていたことが推測されます。禅宗らしい飾り気のない、あくまでも祈りと修行の部屋として、とても質素な構造となっています。

## 建具と障壁画の美術修復

建具の中でも特に襖は、幾層にも及ぶ和紙が貼り重ねられており、剥がしていく過程で襖の下張りから古文書や歴史的資料が発見されることがあります。現在は金沢にある工房に持ち込まれ、専門の職人によって修復作業が行われています。丁寧に襖から和紙を剥がし、それに描かれた絵には剥落止めを行いました。1枚の襖の修復には数週間もの日数を要します。また、のりに使用される澱粉は、金沢の製粉会社から取り寄せており、10～15年ほど寝かせたものを使っています。現在の化学性の糊を使用すると、再度修復をするには再剥離が困難となってしまうため、当時から使われていた澱粉糊を使用しています。

## 剥落止めとは

経年劣化によって亀裂や剥落を起こしている塗膜を下地に再密着させる保存技術です。にかわの溶剤を塗布し、劣化の速度を遅くします。



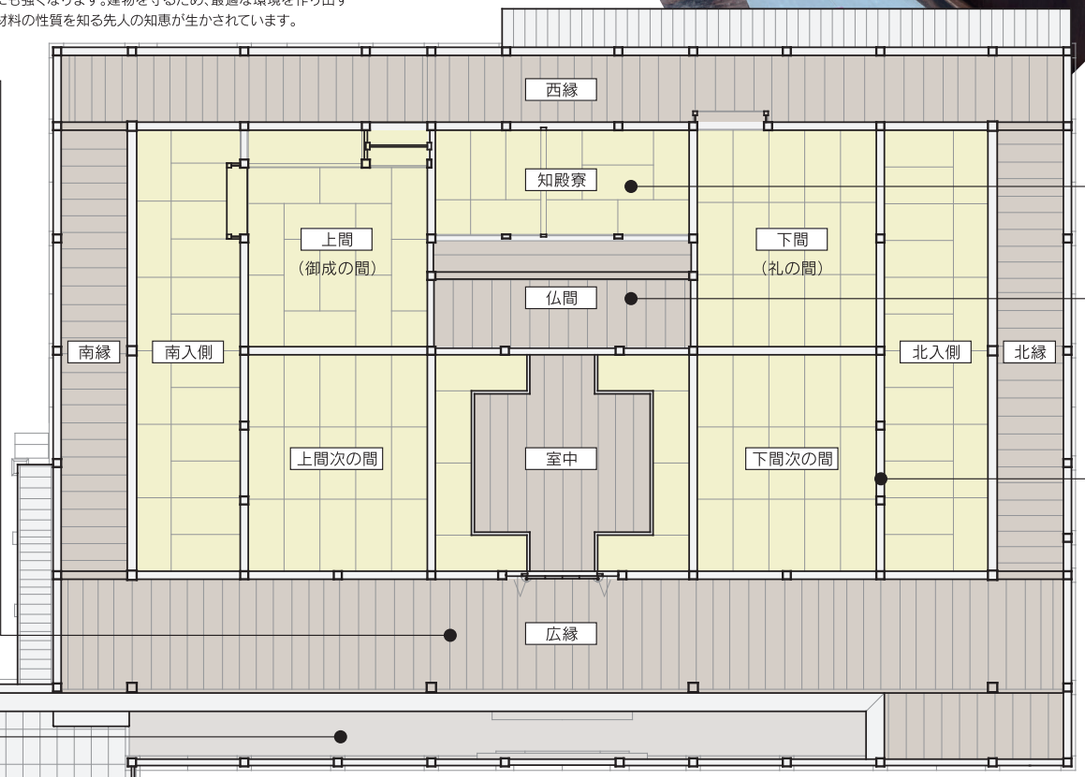
ココがスゴイ！

## 驚くべき先人の知恵！

土壁は五層に塗り重ねることで、山中のように多湿な条件下においても通気性を高め、さらに防火性や遮音性、耐久性にも強くなります。建物を守るため、最適な環境を作り出す材料の性質を知る先人の知恵が生かされています。

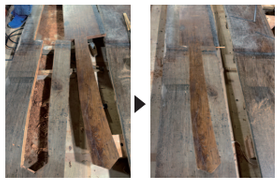
## 土壁と藁

土壁は、土と水に藁を混ぜたものを使用します。藁を発酵させると藁の繊維が土壁のつなぎとなり、壁の強度が上がるとされています。亀裂が入らないようにしっかりと乾燥させ、上塗りを行っていきます。




## 釘の見えない美しい床

本堂の床は、時代の用途に従って全面的に畳敷となっていましたが、建立当初の延宝時代の古図や文政時代の指図に従い、板張りに復原されました。
床板には目鎹釘（めかすがぎ）が使われています。目鎹釘とは、天井や板などの横側から固定するための釘で、直角に折れた鉤（かぎ）状になっています。

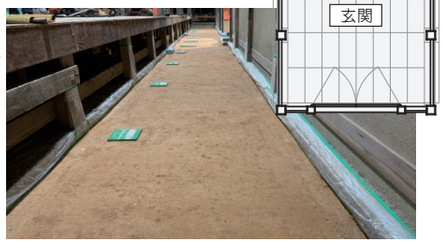


建立当初から使われている欅の床板を残しながら、新しい床板を組み合わせ、ピッタリとパズルのように嵌め込む修復は現代の職人さんの高い技術によるものです。

横から止めることで、床上上面に釘を見せない上等の工法です。

## 北陸ならではの土間

江戸時代には、本堂前列に土間がありましたが、明治以降には用途に合わせて、土間だった部分に床を張り畳敷となっていました。今回の修理では、以前の土間の形に復原します。前列に土間を取り込んだ形式は、北陸地方の禅宗の寺院建築などによく見られます。



ココがスゴイ！

## 障壁画の修復技術!!